

ひがしやしき 東屋敷遺跡

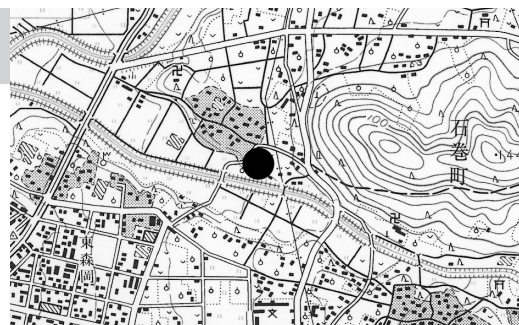
所在地 豊橋市石巻本町字東屋敷、字間場
(北緯34度47分22秒 東経137度26分15秒)

調査理由 道路改良工事(主) 東三河環状線

調査期間 平成22年5月～平成22年8月

調査面積 1,310㎡

担当者 鈴木正貴・永井邦仁



調査地点(1/2.5万「豊橋」)

調査の経過 調査は主要地方道東三河環状線道路改良事業にかかる事前調査で、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査は平成20・21年度にも実施しており、調査面積の総計は4,420㎡である。今年度は遺跡北端(10A区)、篋矢神社北側(10B区)、同東側(10C・D区)を調査した。

立地と環境 遺跡は、石巻山西麓の河岸段丘上に立地する。遺跡南端は段丘崖になっており崖下を三輪川が西流する。三輪川を挟んだ対岸の段丘上には西浦遺跡があり、弥生時代～江戸時代の遺構と遺物が検出されている。当該遺跡の北端は段丘に入り込んだ小さな谷に面しており、小谷の北側には縄文時代早期の押型土器が出土した多量な燧石遺跡や中世～戦国時代が中心となる神ヶ谷遺跡がある。

調査の概要 遺構検出は、10A・B区では地山となる礫混じり粘土層上面、10C・D区では地山層上に広がる黒ボク層上面で行った。

10A区では7世紀代の小型の竪穴建物跡(3m×2m)4棟と廃棄土坑を検出した。竪穴建物跡は全て重複関係にあり1棟が作り替えられながら継続したものと考えられる。廃棄土坑からは6世紀以降の土師器高杯脚部や須恵器が出土した。他にはピットを多数検出したが、山茶碗が出土するものがあることから中世の掘立柱建物などが想定される。調査区の北半は地山が小谷へ傾斜しており、遺構・遺物ともに希薄となる。

10B区では江戸時代前半の瀬戸美濃産陶器が出土する大型の土坑(3m以上)と一部が重複する竪穴状遺構、それらに先行する南北溝を検出した。調査区西半では掘立柱建物の一部とみられるピットを検出した。

10C・D区では平成20年度調査(08区)で検出された弥生時代後期～古墳時代前期の集落や古代以降とみられる東西溝の続きとなる遺構が検出された。前者の時期となる竪穴建物は7棟あり、硬化した貼床面も残存していたが遺物は少なかった。遺物は弥生土器と土師器の小片の他に山茶碗と土師器皿がみられた。後者は10C区東側の平成21年度調査(09A区)で検出された中世の掘立柱建物跡に関わるものであろう。

まとめ 3年次の発掘調査で、東屋敷遺跡では(1)弥生時代後期～古墳時代前期、(2)古墳時代後期、(3)平安時代～鎌倉時代、(4)江戸時代の各時期にわたる集落遺跡が確認できた。(1)は竪穴建物約30棟が遺跡南端の段丘崖面に沿って展開し、篋矢神社とその付近が中心になるであろう。(2)は調査区北端のみでみられこの時期になって初めて段丘内の小谷の開発が進んだことを示唆する。(3)は篋矢神社東側の段丘頂部の平坦面に掘立柱建物群が広がる。当該遺跡周辺は伊勢神宮の荘園である神谷御厨の推定地である。中世遺跡が点在することからも中世の面的な開発の一部とも考えられる。(4)は字東屋敷地内のみに限定的であることから、現在の東屋敷集落に繋がるものと推察される。(永井邦仁)



遺構全体図(1:1,000)